

九州電力の最大電力需給バランス～原発がすべて止まっても供給力に不安はない

2011.9.1

九州電力は2011年7月15日、「今夏の需給状況について」というプレスリリースで(九州電力ホームページ掲載)、「玄海原子力2・3号機と川内原子力1号機の運転が再開できない場合、夏季ピーク時に供給予備力が4.0%まで低下します。また、昨年夏の最大需要並みの電力需要となれば、供給予備率は2.2%となります。」と公表しました。

しかし、以下の表で明らかとなり、九州電力は十分な供給力を有しており、電力需給は事実として逼迫しませんでした。

また、2012年夏には全ての原発が停止していることが想定されますが、現在計画停止中の唐津2・3号火力(計87.5万kW)と大分1・2号火力(計50万kW)を稼働させ、苅田新2火力(37.5万kW)のH23年度廃止時期を延長して発電設備をフル稼働すれば、供給予備力は84.2万kW、予備率5.0%です。最大電力需要が今年(2011年8月30日の1,535万kW)と同じだとすれば、供給予備力は233.2万kW、予備率15.2%です。九州電力が原発を全て停止させても、十分な供給力を有していることは明らかです。今後、再生可能エネルギーやガスコンバイン発電などを拡大しながら社会全体の省エネを推進すれば、企業・産業活動の面からも原発に頼る必要はありません。 【表中の単位万kW】

	2011年夏				九州電力公表値と設備量との差	2012年夏 全ての原発停止			備考
	九州電力による公表値		資源エネルギー庁発電設備量(注1)			H23年度供給計画	H22最大需要(2011.8.30)		
最大電力需要①(注2)	H23年度供給計画	最大予測値	H23年度供給計画	最大予測値		1,684	1,535		
	1,669	1,698	1,669	1,698					
供給力	原子力②	250	262.9(注4)	12.9	未公表	H23年度供給計画	資源エネルギー庁発電設備量(注1)		
	水力③	312	327.9	15.9		0	327.9	2011年夏は、玄海1号(55.9)、玄海4号(118)、川内2号(89)の合算で262.9。2012年夏は、全ての原発の停止が予測されるので0。	
	火力④	897	1157.7(注5)	260.7		1157.7	九電ホームページでは、揚水発電・一般水力に区別されていたが、その内訳は公表されず。		
	地熱など⑤	16	21.6(注6)	5.6		21.6	九電ホームページでは、石油・LNG・石炭に区別されていたが、その内訳は公表されず。		
	九電合計⑥	1,475	1770.1	295.1	未公表	1507.2	②+③+④+⑤		
	他社受電⑦(注3)	261	261	—	未公表	261	九電が購入している会社名は公表されず		
	合計⑧	1,736	2031.1万kW	295.1	1,908	1768.2	⑥+⑦		
	供給予備力⑨	67	38	362.1	333.1	—	224	84.2	233.2
供給予備率	4.0%	2.2%	21.7%	19.6%	—	13.3%	5.0%	15.2%	⑨÷①

注1) 「発電所認可出力表」(2011年6月、資源エネルギー庁電力調査統計)より。発電設備量に「苅田新2火力(2010年4月から停止:37.5万kW)と大分1・2火力(2002年度から計画停止:25+25万kW)、唐津2・3火力(2004年度から計画停止:37.5+50万kW)の計175万kWは計上されている。」(電力市場整備課)
 注2) 最大電力需要の「H23年度供給計画」1,669は最大需要発生日の最高気温34.2℃、「最大予測値」1,698は最大需要発生日の最高気温34.8℃。(九電HP)より。
 注3) 「他社受電」の内訳は、九州電力が経営情報だとして秘匿しているため不明だが、卸電気事業者[Jパワー(電源開発)と日本原電]が中心で、一般電気事業者[他の電力会社]や特定電気事業者、特定規模電気事業者は少ないと見込まれる。
 注4) 原子力発電所の2011年夏の設備量(認可出力)は525.8万kWだが、稼働している玄海1・4号と川内2号の計262.9万kWを計上。
 注5) 「火力」の内訳は、汽力1118.2万kW、ガスタービン0.3万kW、内燃力39.2万kW。
 注6) 「地熱など」の内訳は、地熱21万kW、風力0.3万kW、太陽光0.3万kW。